幽霊生活

めりめり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幽霊生活

【Ｎコード】
Ｎ５７８２ＢＬ

【作者名】
めりめり

【あらすじ】
「高坂さんは初めて死んだ方ですよね？どのコースを選びますか？」
俺、幽霊として新しい生活をはじめます。

プロローグ（前書き）

※不定期更新、いきなり終了もあり得ます。放置の可能性が高く、
それでも良ければどうぞ

プロローグ

「はいはーい。皆さん落ち着いてください。皆さん死んだのは初めてだと思いますが、落ち着いて係員の指示に従ってください」

ざわざわと、色々な声が聞こえる中、ひときわ大きな声でそんなアナウンスが聞こえた。

高原健太（たかはらけんた）１６歳は、交通事故により他界した。
彼はなんの特徴もない典型的な若者。やる気もなく日々をだらだらと過ごす若者であった。
そんな彼は若者のように自転車で学校に通い、若者の通りイヤホンをして音楽を聴きながら、若者の如く信号を無視して、人間としてしんだ。
栄光も衰退も栄転も左遷もなく、愛する女性も確固たる親友も、彼にはできず、その短い人生は幕を閉じたのである。
さらにその後、彼は勝手にその体を焼かれ、骨だけの姿で壺に詰められ、年に何回も行かず、一人では決してたどり着けない家族の墓に埋葬された。
そうして見事幽霊となった健太は今、俗にあの世と呼ばれる世界の入口で、このあとの幽霊生活を決める手続きをすることとなり、今に至る。

「もう家庭内でも除け者として扱われて、職場でも毎日怒られて、なんだか生きてる意味があるのかなって、なって…しまって……うぅ」
「分かりますよ、田中さんの気持ち。でもこうしてあの世に来たん

ですから、もう過去のことは忘れて、ね。新しい生活を始めようじゃないですか」

俺の前、イスに座っていかにも受付嬢とでも言うべき人と泣きながら話している男は「ありがとうありがとう」と呟きながら、消えていく。

そして、「高原健太さーん」という声と共に、俺は前の空いた椅子に座った。

「はい、今回高原さんのお相手をする南です。高原さんは死ぬのは初めてですよね？」

南と名乗った受付嬢は俺に話しかける。そのフレンドリーな笑顔に俺は戸惑った。受付の人はきれだった。

「あ、はい。そうです。こんなところがあるなんて知りませんでしたよ」

「そうですよね。はじめてくる方はみんな、高原さんみたいな反応をしますよ」

南は上品に笑った。それだけで俺は嬉しくなる。

「では、今日高原さんには3つのコースを用意いたしました」

そういいながら南は机の下から何やらファミレスのメニューのようなものを取り出し、俺の前に出す。

えーと、『さくっと生まれ変わっちゃおう！成仏コース』『神になりたい。修行コース』『天界であなたらしいライフを。残留コース』。

なんだこの胡散臭いタイトルは……。やけにノリが軽いんだよ。

「成仏コースなら生まれ変わり待機してもらって、、えーと今はフランスあたりに生まれ変わるのが一番待ち時間が少ないですね」

生まれ変わり待機ってなんだよ。そもそも生まれ変わるのってそんな簡単なのかよ。

もしかしたら生まれ変わりとか言って、俺の存在を消す気じゃあるまいな。。。って、俺ってもう死んでるんだっけ。

よく考えると変な話だ。死んだっていうのに俺は意思を保って、あまつさえ人とかいわまでしてるんだからな。

――まてよ。そうなると、俺の前にいる南は、実は死人なのか？

「あ、高坂さん。今、面倒なこと考えてるでしょ」

面倒とはひどいな。結構大事なことじゃないか。

「いいじゃないですか。死んで人生リセット。あたらしく第二ステージが出来るようなもんですよ。高坂さん、そんなに若いのにここに来てるってことは、全然人生楽しんでないでしょう？それを不憫に思った神様があなたにチャンスをくれたとでも考えて、早く新しい自分を楽しみましょう」

南の言うことはテキト―だが適当だ。確かにそんな深く考えることでもないかもしれない。

俺は考えるのをやめて、再びメニューに目を移す。

まず『成仏コース』。

えー、「人生の記憶も何もかもリセットしちゃって新しい生命として生まれ変わっちゃおう！生まれる国だけは選べるからお得！もしかしたら前世の記憶も残るかも」

要するにもう一回人として生きれるってことか。でも、記憶リセッ

トじゃあんま意味ないよなあ。
次、『修行コース』。
「君は神になりたくないかい？神になって現世を管理しよう！お遊びにちょっと運を振りまくのもいいかも」
ないな。これはないな。管理なんて面倒なことしたくないよ。不幸を振りまけるなら楽しそうだけど。
最後、『残留コース』。
「幽霊としてさ、この天界で新しくＬＩＦＥを始めようよ。こっちの世界で成功するのもいいんじゃない？」
つまりこっちで、生きろってことか。一番元の世界に似てるのかな？

「よし」
「お決まりですか？」

にこにこしながら南が聞いてくる。まるで天使のような美しさだ。
――まさか天使なのか。

「えぇ。俺はこの残留コースを」
「分かりました。では４－Ｂ地区に高坂さんの部屋を一つ作っておきますね。これが鍵です」

鍵を受け取る。なんだか本当に死んでるのかどうかわからなくなった。

「では４－Ｂに飛ばします。良い幽霊生活を！」

その声を最後に俺の意識は消えた。

プロローグ（後書き）

さくしゃのあとがき

なんか書きたくなりました。感想お待ちしております

ご近所挨拶、知り合いが出来る

ガチャリ。
鍵を開ける。少し重いそのドアはなんだかリアルだった。

「ここが俺の部屋か」

何もない6畳ほどの部屋。トイレも一応あるみたいだ。
しかし、何もないってことはどういうことだろう。この世界で物を手に入れろということだろうか。
ついこの前まで俺が生きていた世界では、それを働くと言ったがここでも同じなのだろうか？

「ん？何だあれ」

――なんて俺が思い悩んでいるのを見透かしたように、何もないと思われた部屋にはいかにもな封筒に入った手紙が置いてあった。
差出人、霊魂管理委員会。件名、取扱説明書。
霊魂管理委員会？あの南などがいた受付の大元と考えていいのか？
まぁ、なんでもいいか。開けないことには始まらないわけだしな。
ビリっと雑に封を切る。中に入っている紙を取り出し、開いた。

『このたび幽霊として残留コースを選んだ方のために、私たち霊魂管理委員会はこのような手紙を送らせていただきました。
まずこの世界についてざっと説明しましょう。今、あなたがいる世界は天界といいます。この天界には色々な世界から、「死」という体験をした霊魂が集まっています。
天界は幾つもの世界に分割され、そうですね、あなたたちが生きていた世界のような世界がいくつもあると考えてもらって構わないで

す。
基本的にはこの世界同士を行き来することはできません。また、言語に関しては皆様は今までどおりで構わないです。
では次に、この世界でのルールを説明します。
この世界では皆様はどのような状況であろうとも働かなくてはなりません。働いて、この世界にいられる存続時間というものを得るのです。
もうお分かりだとは思いますが、存続時間とはこの世界にいられる時間のことです。この存続時間が消えた場合、しかるべき処置が下りますので承知ください。
また働くといっても、それは様々な方法があります。たとえば学生の方の場合、生徒会、部活、その他諸々の学校運営にかかわった場合でも働きとなります。
では皆さん良い幽霊生活を』

俺は読み終えたそれを丸めて、部屋の隅へと投げ捨てた。
失望したからだ。
――この世界は俺が生きていた世界と何一つ変わらないのだから。
別に俺は生きていた世界に不満があったわけではない。ただ、こうして死んで新しい世界に連れてこられても、何の変化もないのだ。
無気力に何をするでもなく生きていた俺でも、人である。変化に期待をするのだ。
だが俺がぐちぐち言ってもそれがルールらしいから、変わらない。
同じなのだから。
……俺は部屋を出た。そうさ、幽かな期待のせいで忘れていたアレをやるためだ。
まぁつまり、ご近所挨拶ってやつさ。

呼び鈴を押して返事を待つ。そして待つこと少し、

「あーい」

という声とともに俺の前にあった壁がなくなる。
その壁をなくした奴は、男だった。明るい茶髪で表現するなら犬。
人懐っこい方じゃなくて、警察犬の方だ。
これは、近所挨拶なんてやめときゃよかったかな。

「隣に住むことになった高原です。これからよろしくお願いします」

そこまで言って自分が菓子折も何も持ってないことに気づく。はぁ、
なんで俺はご近所挨拶なんてしようと思ったのか。
しかし隣の部屋の男は別に気にする感じもなく、なんというか戸惑
っていた。いや気にして戸惑ってるのか？
しばらくの沈黙が流れる。

「あ――スマン。呆けていた」

と、男が声を出した。なんだか救われた気がした。

「いや、この世界でご近所挨拶されるだなんて思ってなかったから
な。俺もしときゃよかったかな」

男は言いながら笑う。あまり人見知りしないタイプなのだろう。う
らやましい限りだ。俺もそれほど気さくなら、もっと充実した人生
――少なくとも誰か俺のために泣いてくれる人がいただろう。

「そうだ。せっかくだし上がってけよ。これから長い付き合いにな
るんだしよ」

男はドアを開けながら空いてる片手を使って手招きをした。おいおい、俺は初対面なのに不用心すぎやしないか。
しかし男は俺の疑問を感じ取ったように、

「あんたが不思議に思ってることも、話してやるからよ」

といって部屋に入って行った。

ご近所挨拶、知り合いが出来る（後書き）

短編の予定だったので、結構速く終わるかもしれないですね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5782bl/

幽霊生活

2012年12月17日03時06分発行